

共通テスト試行調査を 分析して



安武内ひろし

大学入学共通テスト試行調査（プレテスト）第2回が2018年11月に実施されました。本番も同様に行われるかは不明ですが、本稿では、この試行調査を分析してわかった点をつづっていきます。

1 英語共通テスト全体を見て気づく点

センター試験と比較しての最大の相違点は「配点」です。従来、筆記［リーディング］（以下、単に「筆記」）200点＋リスニング50点だったのが、筆記100点、リスニング100点になりました。筆記の配点が半減、リスニングの配点が倍増し、その結果、筆記（書きことば）とリスニング（話しことば）の比率が4：1から対等になります。そもそも今回の改革は「英語4技能の力を均等に伸ばす」というのが主目的ですから当然とも言えます。

解答時間に変更はありません。筆記が80分でリスニングが30分のままです。これではバランスが悪いので、今後改善の余地がありそうです。その他、図・表・絵などヴィジュアル素材の挿入が異常に多いのも今回の特徴です。

2 リスニングテストの新しい点

一番目立つ点は、**問題読み上げの回数**です。センター試験ではすべて2回読みでしたが、共通テストでは2回読みと1回読みの問題とが混在しています。不思議なことに、問題が短く単純な前半部分（第1問～第3問）の問題は全部2回読まれ、長く複雑でややこしい内容の後半部分（第4問～第6問）は1回だけ読まれています。逆のほ

うがよいのではないかと思います。

すき間の無音時間の短縮も目立ちます。すき間とは、1回目の読みと2回目の読みの間のすき間、そして問いと問いの間のすき間のことです。センター試験ではおよそ10～11秒あったすき間が、共通テストでは5～8秒に縮んでいます。この5～8秒のすき間時間は TOEFL® のレベルですから、受験生に切迫感を与えるでしょう。

さらに**読み上げスピード**も、センター試験に比べて速くなっています。その結果 natural speed に近づき、「英語の音変化」（音の連結・脱落・吞み込み・短縮・同化など）が生じて、日本人が予想する音とはかなり異なる発音が多くなります。

異なるバックグラウンドの話者による英語読み上げも新しい点です。一つは(1)米音（主に米国とカナダ）に加えて英音（主に英国と豪州）であり、もう一つは(2)非ネイティブ英語です。(1)については、入試のリスニングでは大半の大学が米音での読み上げで、東大のように必ず米音と英音を出す大学は少数でしたが、今後は米音に加えて英音への対策も必須になるでしょう。(2)の非ネイティブ英語は、英語圏以外の人々の喋る英語を聴き取る問題です。果たしてそれが大学入試で必要なのかどうかは意見が分かれるでしょうが、今回は第4問で「4つの学生寮を選ぶにあたって、それらの寮に住む各国出身の寮生から話を聞く」という設定になっていました。

センター試験の第2問型の問題も消えました。会話が途中まで進んで、さて相手は次に何と言いますか？という形式です。これは、実際の英会話

場面では必須の技能である「会話相手の次の言葉を予測する力」を見るよい形式だったので、復活してほしいと思います。

3 筆記テストの新しい点

センター試験にあったいろいろなものがなくなっていることに気づきます。まず設問指示の日本語がなくなり、すべて英語に置き換わりました。

次に、旧第1問の「発音・アクセント」、旧第2問の「文法・語法・語彙」「語句整序完成」、旧第3問の「短い会話文」「不要文削除」「長い会話討論文」がごっそりなくなりました。これは、英語4技能の下位に位置する分野（発音・アクセント・綴り・文法・構文など）は4技能のそれぞれの試験でチェックされるので筆記テストの中に無理して盛り込む必要はない、という考えだと思われる、それは妥当な判断だとは思いますが、その結果、全体を見たときにバラエティーに欠けた単調な構成になってしまっている感が否めません。

共通テスト（筆記）の構成は以下の通りです。

[1] グラフ・チャート読み取り（旧第4問A・B）が、新第1問AとB、新第2問AとB、新第3問です。これは、図、表、グラフ、Eメール、パンフレット、ポスター、挿絵など、何らかのヴィジュアル素材を見ながら問いに答える形式です。共通テストのそれぞれの問題では、ヴィジュアル素材が必ず使われているのが特徴ですが、それが果たして効果的に作用しているのかと問われると、やや疑問ではあります。受験生の側では、解答するのに必要ない部分は思い切って読み飛ばすという判断が必要になってくるでしょう。

[2] 物語文読解（旧第5問）は新第3問Bです。新第5問の「伝記」もこの枠に入るでしょう。

[3] 論説文読解（旧第6問）は新第2問のB、新第4問、新第6問AとBになっています。

それぞれの問題形式が重複しているために、もっと整理すれば3分の2くらいの問題量でも十分、正確な学力は測定されうるだろうと思われる

す。時間も80分ではなく60分くらいに切り詰めることが可能だと思います。浮いた20分をリスニング試験に足せば筆記60分とリスニング50分でバランスもよくなりますし、リスニングの後半の問題を2回読みしても時間が確保できます。

筆記でさらに気づく目新しい傾向としては、「**事実（a fact）ではなくて意見（an opinion）を選びなさい**」という指示のある問題（第2問B）、それから第4問・第5問のように「**2つ以上の正解があるかもしれません**（You may choose more than one option.）」という設定の問題です。これらに対する対策はぜひ必要だと思われます。

筆記テストの総単語数は（設問の英語部分を除けば）センター試験とほぼ同じであり、英文の難易度も変わりません。

4 まとめ

分析しての結論をまとめると、**リスニング対策が以前よりもはるかに重要になってきた**ということに尽きます。これがセンター試験の英語との最大のちがいです。

明らかに難化しているので、今まで以上に本腰を入れてリスニング指導をする必要があります。「筆記と同等の配点だ」というアナウンス効果も大きなインパクトを与えそうです。以下の対策が必要になるでしょう。

- (1) 読み上げが1回だけの問題にも即応できる力をつける（ただし私大は今も大半が1回読み）。
- (2) 様々な人が発音する英語（特にイギリス発音と非ネイティブ発音）の音に慣れさせる。
- (3) 速いスピードの英語（natural speed）を聞き取る訓練を重ねる。生徒教材用に意図的にゆっくりと読み上げられた音声では「英語の音変化ルール」を習得させることはできません。
- (4) 絵や図表（特に講義ノート）を見ながら英語を聞く訓練を繰り返す。

（あぶない ひろし・英語教育評論家、佐鳴予備校・@will 講師）